

なお、アズマネザサ・ハナニラ・ヒガンバナ・キシヨウブ・ミヨウガ・ソメイヨシノ・アメリカスミレサイレンの7分類群は、人為的に持ち込まれて繁殖したもので、全体の5.1%を占めている。

また、シロダモ・アケビ・モッコク・トベラ・イヌツゲ・センダン・ヌルデ・ツルウメモドキ・マユミ・エビヅル・キスタ・ミズキ・エゴノキ・トウネズミモチ・イボタノキ・クサギの16分類群は樹木で、指定地に隣接して植栽された樹木から落ちた種子や、鳥が運んだ種子から芽生えて育ったもので、全体の11.8%を占めている。

(3) 植物相の変化を分析して得られた自然環境の変化（総合判定）

これまでに実施してきた田島ヶ原サクラソウ自生地に於ける植物相の継続調査を利用して、調査を開始した1963年~1967年の植物相と、調査が最新の2003年~2007年の植物相とを比較して、得られた変化の内容を分析して資料をもとに、自然環境の変化を考察し、下記の結果を得ることができた。

1. 1963年~1967年の調査では246分類群、2003年~2007年の調査では344分類群を確認したことから、分類群は40年間に135.8%に増加していることが明らかになった。

この分類群が増加した経緯をたどることで、1963年~1967年当時は指定地の約2/3が耕作地であったこと、それが2003年~2007年には潜在植生による遷移によってオギーヨシ群落やつる植物群落が成立していることを知り得た。このことから、植物分類群が増加した理由を、自然を攪乱した耕作地からオギーヨシ群落・つる植物群落による自然植生の原野に遷移する過程で、指定地に進出してきた植物分類群が加わったことによるものと考察した。

2. 1963年~1967年に確認された246分類群の中で、2003年~2007年に生存しているのが203分類群（全体の82.5%）、途中で消滅したのが43分類群（全体の17.5%）であった。

2003年~2007年に生存していた203分類群は、現植生の中核をなす在来種のオギ・ヨシ・コバギボウシ・アマドコロ・ノカラムツ・ノウルシ・サクラソウなどの湿生植物であり、途中で消滅した43分類群は、在来種でより好湿潤性のコブナグサ・チゴザサ・カサスゲ・ヒンジガヤツリ・コオニユリ・ヤナギタデ・タガラシなどの湿生植物であった。このことから1963年~1967年頃の指定地には、好湿潤性の湿生植物が生育できるかなり湿潤な水環境が存在していたこと、この40年間でかなり湿潤な水環境が消失したことが裏付けられた。

3. 2003年~2007年に生育していた344分類群の中に、1963年~1967年には生育していなかったが、その後繁殖したものが136分類群（全体の40.7%）にもなっていることが明らかになった。

指定地に進出した経緯では、指定地周辺に生育する在来種の湿生植物からの繁殖が、半数の68分類群、外来植物の進出が33.1%の45分類群、園芸植物などの持込みによるものが、5.1%の7分類群、指定地周辺の植栽樹や鳥が運んだ種子から育った樹木が、11.8%の16分類群であった。

進出してきた分類群の半数が、指定地周辺にみられる在来種の湿生植物に由来していることは、指定地が湿性環境を保持しているためと判断できる。一方、水環境が中性でアルカリ性土壌を好む外来植物が、全体の33.1%も占めていることは、指定地の水条件が中性環境に近い湿性環境になっていることを示すものであろう。総合して判断すれば、指定地の乾燥化によって水環境が変化した結果、指定地の植物相が変化したものと結論できよう。

以上